パラディスの秘録

幻獣の書

タニス・リー　浅羽莢子＝訳

The Secret Books of Paradys／The Book of the Beast

パラディスの秘録

幻獣の書

タニス・リー　浅羽莫子＝訳

The Secret Books of Paradys／The Book of the [illegible]

角川書店

パラディスの秘録

幻獣の書

タニス・リー

1992年5月30日　初版発行
1992年7月30日　再版発行

訳者／浅羽莢子
発行者／角川春樹
発行所／株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3　〒102　振替　東京3-195208
TEL　営業03-3817-8521　編集03-3817-8451
印刷所／旭印刷株式会社
製本所／株式会社鈴木製本所
装丁　朝倉哲也＋design CREST

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします
©Printed in Japan
ISBN4-04-791199-2　C0397

幻獣の書

パラディスの秘録

The Secret Books of Paradys II

THE BOOK OF THE BEAST

by

Tanith Lee

Copyright © Tanith Lee, 1988

Japanese translation rights arranged with
UNWIN HYMAN LIMITED
through Japan UNI Agency, Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

緑の書 ―― 5

エメラルドの瞳

巻の一　学徒 ―― 7
巻の二　花嫁 ―― 42
巻の三　ユダヤびと ―― 90
巻の四　贖罪山羊（しょくざい） ―― 107
巻の五　寡婦 ―― 125

紫の書 ―― 133

紫水晶を出でて

巻の一　ローマびと ―― 135
巻の二　自殺者 ―― 187

緑の書――205
エメラルドの瞳
巻の六　狂人――207
巻の七　魔物――217
解説――245

緑の書

エメラルドの瞳

巻の一　学徒

君が欲せし林檎携え、
いにしえに楽園より来たる者あり。
君おれば今なお、望むがままに、
わが園にもかの林檎また実るべし

――シェリー――

第一夜の明けるより早く、この宿に幽霊の出ることは知れた。夜の最初のひとときに推察してしかるべきだった。

敷居際で出迎えたは魔女のごとき老婆。

「ラウーラン旦那で？」と嗄れ声で昔風に問われた。薄暗がりに掲げるはゆらめく蠟燭ただ一本。

中も暗かろうことはすぐに察せられた。
「ラウーランだ。荷物と衣装櫃は届いているか？」
「ついて来なされ」断罪され、荷物のあろうはずもない者を迎える地獄の門番さながらの態度。
「御主人に、この家の主に会わせてくれるのか？」
「ここには主なんぞいませんさ。誰もいやしません。ここらの主は『誰でもない』旦那」
老婆はラウーランを導き入れ、黒い洞窟並みの広間を横切り、さらに黒い中庭を抜け、外階段を登り、とあるアーチをくぐって入り、廊下を二、三本通り、蠟燭の光にわずかに薄められた闇の中で鍵を取り出し、木の扉を開けてくれた。当てがわれた部屋に置かれた二本の蠟燭を灯すと、夕食は一時間後に届けるが、話し相手が欲しければ、下の台所でおのれや馬丁と食事を共にしても構わぬと告げた。明らかに上客ではなく、そう扱う気もないことを思い知らせるつもりなのだ。
そこでこちらも当てつけがましく、下で食べると云ってやった。おぼえていられそうもない道順を教えられた。
「それから階段では気をつけなされよ」老婆は云った。
「何に気をつけるのだ？」
「『誰でもない』旦那にさね」と答え、けたけたと笑った。
冗談好きの妙な老婆だった。

ラウーラン青年は上背があって体格もよく、生まれは黒髪の多い北部であり、象牙の肌に黒檀の髪という姿はそれなりに整っていた。父は多くの馬や牛、葡萄園や果樹園を持ち、畑となると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

数も知れず、他の息子たちが汗して働くなり女遊びに走るなりしている間、横に長い平屋の屋敷内で、ラウーランは家庭教師に締め上げられていた。家庭教師たちはラテン語や美しいギリシャ語で青年の脳味噌を膨らませ、哲学や錬金術の手ほどきで精神に道をつけた。ラウーランはいずれ都へ行き、サクリスタン大学で学問を修めると定められていたのである。

その時が来ても悲しさはなかった。博識になるにつれ、家族には疎外されていた。その頃には、くさめをしても詭弁か謎かけを弄していると疑われる始末。都に就いてといえば、教会や図書館、淫売宿だらけと聞かされていた。知性をくすぐり肉を歓ばす、あらゆる望ましい悪の極致である、と。

下宿の手配をした父親の家令が語ってくれたのは、宿が十年前まで貴族デュスカレ一族の住む大宮殿であったことのみ。早や没落しているが、それも家令の信ずるところでは政治上の陰謀によるもの。都の名家の間には十年も前から既に抗争が絶えず、路上での刃傷沙汰は無論のこと、公爵の諮詢室においても互いの息の根を止め合わんとしていたのだ。

デュスカレ一門の幾人かは今なお館に住んでいるという。館は荒れてはいるが、今も往時の華やぎをとどめているとの話。他に誇れる宿であり、人聞きもよい。

だがラウーランは黄昏の細い通りに駒を進め、廃墟のごとき壁に囲まれた庭園の奥にそそり立つ館の塔や、装飾的でありながら光の当たらぬ、何か古い墳墓を思わせる外観を見るが早いか、中にあるは貧しさと、鼠や虱の害のみと悟り、父親の家令が他の息子たちかわいさにおのれを欺いたものと確信した。

夕食はさほどひどくもなく、たっぷりとした野菜料理に米の飯、そしてグズベリのゼリー、パンケーキと麦酒より成っていた。食費も渡してはあるが、ごまかされぬ保証はない。今でさえ、老婆も骨と皮だらけの馬丁も健啖ぶりを示し、舌鼓を打っては、わずかに残った歯をカスタネットのごとく鳴らしている。

「明日は牛肉の料理を頼めないかな」ラウーランは云ってみた。

「牛肉が手に入ればの話でさね。わしのこの哀れな足じゃ、肉市場まで行ったり来たりするのは無理じゃし」老婆は答えた。

「あの女中をやればよい」ラウーランは何気なく云った。「それはそうと、あの娘にもあとで食べさせるのだろうね」

この言葉は沈黙に迎えられた。

ラウーランは麦酒のおかわりをした。

馬丁が老いた虫食い狼さながら、牙はなくとも危険なことに変わりはない眼でじっと見つめている。老婆がすり潰した野菜の皿からぎろりと眼を上げる。

「女中なぞいるもんかね。ここにゃわしとこれだけで」

「するとここの奥様か。お詫びしなくては」

そもそも最初から、召使いなどとは一瞬たりとも思っていなかった。試してみたまで。

老婆が再び云った。「わしらだけでさ。それとお前さま」

「それに『誰でもない』旦那、だろう？　おぼえているよ。だが廊下でご婦人とすれ違ったのだ。まだ若かった」

すると馬丁が口を開いた。「そんなこたありえねえ。云っとくが、旦那、この家にゃわしらとあんた以外、生身の人間は一人もいねえ」

「おや。では幽霊か」ラウーランは云った。

胸がどきりとしたが、不快な思いはなかった。幽霊を信じておらぬだけに、存在を証明して欲しいものと常々願っていたのだ。神の存在もそれは同様。

実は自室を出たあと、当然のごとく道に迷ってしまったのだった。どこにも灯火一つなく、蚯蚓のようにのたくる窓のない廊下が続き、たまに扉があるのみ。時折りやけくそで開けてみた扉もあった。三つはほとんど空っぽの不毛の部屋への入口。そのうち一つには鎧戸の閉ざされた窓があり、一つの床には燭台が置かれていた（燭台は鉄で、たいした値打ち物ではない。蠟燭の燃えさしは遠い昔に鼠に食われていた）。衝動的に開けんとし、拒まれた扉もまた幾つか。錠がおりているというより、錆びついて開かぬだけと思われた。やがて、老婆と共に入ってきた折は眼にした覚えのない上り階段に辿り着いた。戸惑いながら腹立たしげに足を止め、上る意味があるだろうかと考えた。その時、女が一人姿を見せ、階段の上をよぎった。下のそれと平行に走る廊下を歩んでいると見えた。

女の手に蠟燭はなく、ラウーランに見て取れたのも、おのれの手にした明かりが相手の淡い髪と白い肌を捉えたがゆえに他ならぬ。纏った服は何か黒っぽい布地で、胸高に絞られているところはいささか流行遅れ。両手を胸の下で組んでいた。髪は固い銀の網に包まれ、辷るように通りすぎる際に一度ぎらりと光った。それだけ。その一瞬のほのめきのうちに文字どおり消えてしまったのだ。正確には顔は見えなかったが、ほっそりした姿や、全体の印象の何かが、ラウーラン

をして若い娘と思わしめた。
他の者なら、暗い二階の廊下を歩んでいる以上、青年の灯火に気づいて下を見たであろう。だが女は見ずじまい。
追うほどの厚かましさは持ち合わせていなかった。
夕食の間、廊下の美女に――謎めいた存在はすべて美しいものとて、魅力的と既に決めてかかっていたのだが――誰か言及せぬかと待っていたのだが。
「幽霊とすれば」ラウーランは続けた。「誰の幽霊だね？」
馬丁と老婆は顔を見合わせた。ラウーランもよく知っている眼つき。若さに対抗する老人の、愚昧な知性に対する愚昧な悪智恵の、わずかばかり身分が上の者に対する下層階級の仲間意識。
「幽霊なんぞいやしません」老婆がようやく云った。「夢でも見てなすったんじゃ。学問の書物でおつむが一杯じゃで」
「そうかもしれない」ラウーランは嘘の暗い影が深まったことに気をよくして答えた。伝奇小説の基本が忠実に守られている。「恐らく蠟燭の光の悪戯だろう」

自分の続き部屋に戻る道すがら、来る時に迷って階段に行き当たるもととなった二股の廊下を捜してみた。
何としても見つからぬ。
一時間ほども往復や堂々巡りを繰り返し、埃や鼠の都、そして壊れた家具があるのみの実りなき部屋部屋をさらに幾つも覗いた結果、自室に戻る廊下を再び見つけるのも一苦労だった。最初

は興奮にときめいていた心臓も、今は疲れ果て、鉛のごとく重い。寝床に辿り着くと、ありがたいことに温石で温められていたので、敷布の間に身を投げ出し、蠟燭を吹き消すか消さぬかのうちに眠りに落ちていた。

意識のないその状態で、自室の扉が忍びやかに開けられる夢を見た。ほっそりとした影がまず廊下寄りの部屋の中を漂う。漂いながら、閉じられた旅行用の衣装櫃、既に取り出して並べてある書籍、母親に押しつけられた小さな聖骨筥を調べているのが感じられた。次いで闇に閉ざされた寝室に入り、影は辺りを見回した。闇にちらつく白い指がラウーランの脱ぎ捨てた胴着をなぞり、銭の詰まった財布をなぞり――ちゃりんと音を立てさせ――短剣をなぞった――研ぎたてゆえ気をつけろと云ってやりたかった。

それが済むと、飽くことを知らぬ幻は青年の寝台に忍び寄った。

暗闇の中、眠りと閉じた目蓋を通してさえ、女の姿は見て取れた。

パルデュアの磁器を思わせる面が、銀の格子に覆われたごく淡い金髪の後光に包まれ、ラウーランの上にすっと浮かび出た。案に違わず、実に美しく、雪のように涼やかな顔だった。そして眼ときたら――！　このような瞳は見たこともない。間が離れ、心持ち吊りぎみに刻まれ、淡い色の睫毛に縁取られ、極めて澄んでいる。そしてああ、色はといえば。ある僧正の冠に散りばめられていた宝石を思い出させた。粒の揃った一対のエメラルド。陽に透かした二枚の月桂樹の葉のごとき緑。

意識を遠く彷徨わせた眠りの中で、ラウーランは体に命じ、女に語りかけんとした。だが言葉は海から引き揚げられようとせず、唇と舌は服従を拒んだ。

溺れながら、女が身を引き、遥かに泳ぎ去り、夜の水平線を越えるのを見守ることしかできなかった。

大学に出頭するまでに残された時間はわずか一日。短かすぎることがどれほど悔まれたか。退廃の都パラディスの探検に費やす心づもりだったのだが、今は午前のみ当てれば充分と思われた。市場を訪れ、あちこちの隅に詰めこまれた商店を覗き回り、川のきらめくとぐろに跨がる数多の橋を見、生贄の殿堂教会の巨大な灰色の姿を眺めた。一度はそこでミサを聞き、母親に報告せねばならぬ。

午後になって幾らもせぬうちに、都の南西に位置する陰気なデュスカレ邸に舞い戻っていた。陽の下で見ると、山の手の街路は——館はパラディスを構成する丘の一つに建っていたのだが——感じのよいものではなかった。高みを極めたものほど落ちかたは甚だしい。この辺りには他にも大邸宅や堂々たる塔が見られたが、いずれも今は安長屋となり、屋根瓦は飛び、石は朽ち、穴のあいた洗濯物がそこいらじゅうに干してある。路地には吐き気を催す塵芥の山。隙間という隙間にはがらくたや死んだ小動物の骨。

老婆に貰った鍵を用いて館の脇玄関から入り、建物の地理を熟知することに取りかかった。

幽霊の出た廊下を見つけ出すと心に決め、暑い午後を通して捜し求めた結果、しかと眼の覚めた状態で遂に発見するに到った。廊下は今なお、女のそこはかとない香りに充ちているかに感じられた。微かに身を震わせて女の選んだ方向に歩みだす。ほどなく新たな上り階段に出た——幽霊の塒でもあるのだろうか……だががっかりしたことに、階段の上にぽつんとあった扉はひっか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.